

家畜は境界を越える ——モンゴル国西部におけるエスニック集団の共生原理

上村 明 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 研究員

E-mail: kamimura.akira@tufs.ac.jp

KAMIMURA Akira

2020年3月12日投稿受付／2020年3月30日採択決定

Abstract

This paper aims to examine how an ethnic boundary affects trans-ethnic cooperation in pastureland use, drawing on the data of the surveys conducted among Urianhai and Kazakh peoples who live in western Mongolia, Khovd and Bayan-Ulgii provinces, Mongolia, between 2018 and 2020. The surveys revealed that the adaptation to fluctuating environmental and social conditions appears as various corresponding forms of herding and cooperation activities and that the ethnic boundary is not a barrier to trans-ethnic cooperation. Another finding is that *taamar* (“a close friend” in Kazakh) or a close one-to-one friendship is tied between herders of the two peoples. Primarily, it is caused by the necessity of cooperation in pastureland use due to different environmental landscapes between Kazakh and Urianhai lands, which correspond to the administrative units: Bayan-Ulgii and Khovd provinces. However, it is ethical rather than utilitarian because a strong ethic of “one should help the other whenever he wants” constitutes *taamar*. It is the porosity across the double (administrative and ethnic) border, without changing the boundary itself, both the connotation and extension of each group. Thus *taamar* is a “disjunctive synthesis” as a principle of conviviality, neither integration with assimilation nor local self-governance with isolation and territorialization.

Keywords conviviality, ethnic boundary, ecology, pastoralism, Mongolia

キーワード 共生、エスニック境界、生態、牧畜、モンゴル

I はじめに^{*1}

本論文は、モンゴル国西部のモンゴル人（オリアンハイ人）とカザフ人牧畜民との間の牧畜をめぐる協力が、家畜を媒介に、この地域の生態環境、カザフ人が移住してきた歴史的経緯や政治・社会制度とその変化、個人の出会いを通じて、大きく変動する自然環境や不確実性のなかからどのように生成されるのか、現地調査により明らかにし、協力の意義を考える。具体的には、地域の牧畜民が牧地をどう融通しあって利用しているか、そこにエスニックな要素がどのように作用するかという問題をとりあげる。

移動牧畜において、牧地利用とは家畜をどこに移動させるかということと同義である。本論文では、家畜がエスニック境界と行政の境界を越える移動に注目する。しかしながら、移動は、単なるバイオマスの変動に対する適応戦略ではない（Agrawal 1999: 7）。牧地という空間にアフォードされる物理量・性質は、生物学的特徴をもち社会関係の束でもある「家畜＋人間」としての牧畜世帯との「交渉」によって、はじめて資源化される。その交渉は、生態や世帯の条件によってさまざまに変化し、それに応じて実際に行われる牧畜も多様な形態をとる。本論は、エスニックな要素をふくむこのような関係の糸が牧畜の現実を構成していく様を記述する。

このような現実が構成されたものであり構成されていくという考え方は、構築主義と言える。しかし、狭義の構築主義つまり社会構築主義が、人間が主体であり言説による構築であるのに対し、牧畜における主体あるいはエージェンシーは、非ヒト (non-human) をふくみヒトを超える範囲 (more-than-human) に拡張されなければならない。牧畜の現実には、これらさまざまなエージェンシー間のさまざまな回路と応答のスパンによる交渉から生成されるのである。

しかしながら、1990年代から現在にいたるモンゴル国の牧畜における開発や政策は、牧畜民を経済的に合理的な主体として扱おうとしてきた。そこでは、ひとりの人間がさまざまなエージェンシーの重なりあいであることが無視される。そうなった背景には、1990年代初めにはじまったいわゆる民主化による社会主義計画経済から市場経済への移行がある。牧畜の市場経済化は、最重要の課題となり、さらに牧地悪化という環境問題とむすびつけられ、その解決は、ハーディンの「共有地の悲劇」により、牧畜民への牧地所有権の付与に求められたのである^{*2}。

現代モンゴル牧畜研究において、このような市場経済化と国際援助機関による開発プロジェクトは、制度だけでなく牧畜経営の形態そのものの変化を生み、必ず考慮に入れなければならない所与の条件となっている。それだけでなく、開発プロジェクトと直接むすびついた調査も数多く行われるようになった。例えば、一時期のモンゴル牧畜研究者フェルナンデズ＝ギメンズの一連の論文は、スイス開発協力庁 (SDC) の Green Gold プロジェクトに理論的な根拠を与えるものだった^{*3}。また、それらの牧畜部門開発プロジェクトの報告書は、アンケート調査と統計を用いて現状を分析し政策提言をした。そこでは、事例調査や民族誌的記述など質的調査は、科学的根拠が希薄だと否定される傾向があった。

しかしながら、そこで問題となるのは、統計的手法の、とくに移動牧畜におけるその手法の限界である。統計モデルは少数の要素を用い確率論的予測可能性を前提とする。それに対し、移動牧畜は、上述のようにさまざまなエージェンシーの交渉によって成り立っており、それを構成する要素もさまざまで、組み合わせ方も結びつきの強度も変化するだけでなく、個別的で考慮に値しないと思われる些細な事柄が決定的な要素となる場合がおおい (上村 2015, 2017)。移動するたびに世界は統合しなおされる。牧畜を構成する要素のリストは閉じておらず、新しい要素につねに開かれているのである。

確率論的予測可能性を前提とした不確実性と予測できない不確実性とは異なる。クァンタン・メイヤスー (2014) は、「潜勢力」と「潜在性」を区別する。「潜勢力」とは、「与えられた法則 (略) の条件下にある可能的なもののもからなる索引づけられた集合のなかに含まれている、現実化されていない事象」のことであり、「潜在性」とは「可能なものどもによって予め構築されたいかなる全体によっても支配されない生成のなかで創発する、あらゆる事象集合の性質」 (メイヤスー 2014: 88) である。前者は、予測されていたが「運」によって実現しなかった事象であり、後者は、予測すらできない不確実性だ。移動牧畜は、後者の不確実性とわれわれの社会よりもより近く隣り合っているのではないか。

しかし、牧畜民は、自身が一部であるさまざまな交渉の総体を操作できるわけでもないし、認識しているわけでもない。自らのパースペクティブにある環境と交渉し移動しながら

らそこからアフォードされる何かを利用する。

調査するわれわれ観察者も同様にパースペクティブに限定される。松井 (2011) は、「人類学は、フィールドワークというもっとも素朴に経験主義的な現地調査を基本的な方法として成立している。この定義は、人類学という学問自体の方法的、理論的射程を制限するものである。いかに長期間に及ぼうとも、いかに親密濃厚な人間関係をつくろうとも、いかに完璧な言語習得をおこなおうとも、フィールドワークの成果は時間的空間的に限定されたものでしかありえない」(松井 2011: 1) と書く。ここには、人類学の方法論的基礎に対する悲観的なトーンが込められている。それに対して、ハラウェイ (2017) は、論文「状況下に置かれた知」(Situated knowledge) において、視覚 (ヴィジョン) をメタファーとして「部分的な視角 (パースペクティブ) のみが客観的な見方 (ビジョン) を保証する」と宣言する (ハラウェイ 2017: 364)。それは、「客観的な見方とは、視覚にかかわるあらゆる実践の生成能力に関わる責任を隠蔽するのではなく、創出していくような見方である」からだ。ハラウェイのこの宣言は、フェミニズムの文脈で述べられているが、フィールドワークによる民族誌的記述の意義についても同様のことがいえる。ストラザーン (2015) は、民族誌的記述についての著作で、まさにハラウェイのこの論文をとりあげ、フェミニストのポジションと人類学者のそれとの「サイボーグ」的結びつきについて論じている。ひとつのパースペクティブに集中することは、むしろさまざまなパースペクティブと結びつくことであり、ひとつのポジションにとどまることではない。

本論文は、おおきな傾向をつかむため統計データを用いながらも、フィールドワークでの事象の個人的な関わり合いを含めた状況とそれにつながる文脈を記述していく。

II 調査地の概要

調査の対象地域は、図1に示したモンゴル国最西部のバヤンウルギー県ボルガン郡 (以下ボルガン郡) とホブド県ドート郡 (以下ドート郡)、おなじくホブド県のムンフハイルハン郡 (以下ムンフハイルハン郡) である。ここには、モンゴル系のオリアンハイ人とカザフ人が住んでいる。オリアンハイ人は、西モンゴル人 (オイラド人) の下位グループであり、仏教を信仰し、モンゴル語西モンゴル方言の下位方言であるオリアンハイ方言を話す。一方、カザフ人はイスラム教を信仰し、カザフ語を話す。この地域で、両者の通婚は見られず、両者のエスニック境界の人的透過性はない。ただ牧畜という生業を営む点で共通する。モンゴル国全体ではカザフ人の人口に占める割合は4.3% (2000年国勢調査) であるが、バヤンウルギー県全体では88.7% (Султан, Зулькафилъ 2010: 20)、ボルガン郡では2017年統計で83.5% (出典: 郡役場) と、バヤンウルギー県ではカザフ人が多数派で、オリアンハイ人は少数派である。対して、ホブド県のふたつの郡、つまりドート郡とムンフハイルハン郡では、オリアンハイ人が人口の大多数を占め、ほかのモンゴル系エスニック集団に属する住民は少数いるが、カザフ人は現在のところいない。

調査の地域とバヤンウルギー県の全体、さらに現在の中国新疆アルタイ地区からザイサン湖にかけては、清朝がジュンガル征服ののちの18世紀後半にオリアンハイ人に与え

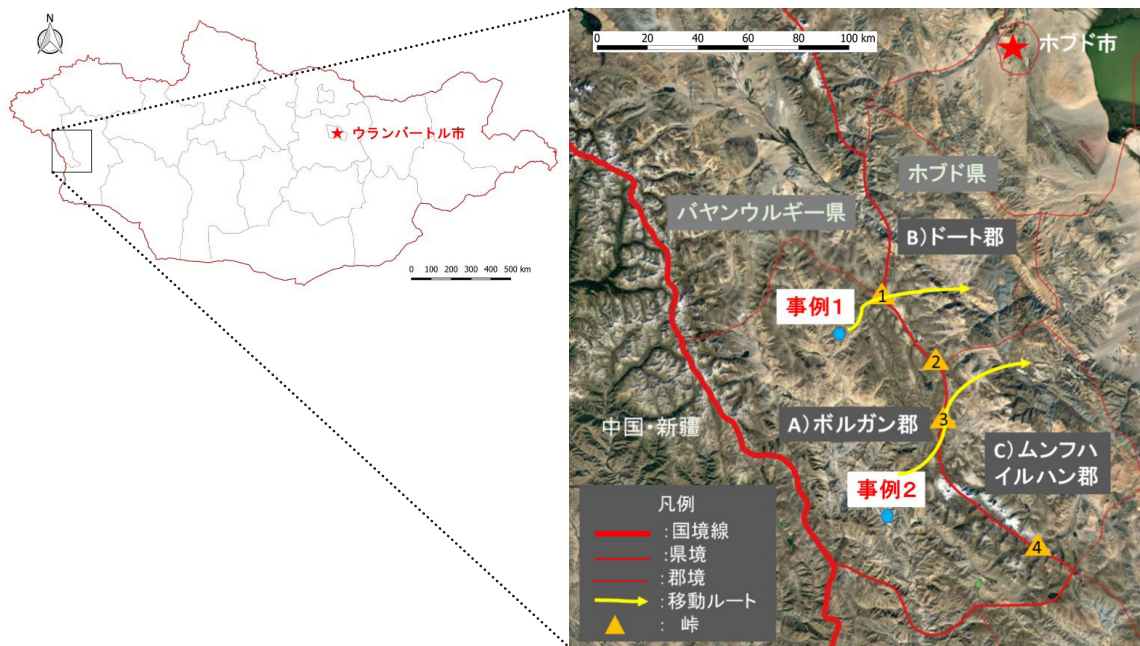


図1 調査地

Google Satellite + QGISで作成

た土地である。19世紀後半になると、多数のカザフ人が流入した。モンゴル国に現在居住するカザフ人の大多数は、中ジューズのアバガ・ヘレイド部族に属する(Золбаяр 2016: 16)。

1930年ごろまで、この地域に、国境も含めて明確な境界はなかった。1940年に、「カザフ人とオリアンハイ人の県」としてバヤンウルギー県が、ホブド県から分離され設立された。これは、新疆アルタイ地域への領土的興味をもつモンゴル政府が、協力者としてのカザフ人に実質的に与えた県であり(上村2016a)、彼らの人口が増加するにつれて実態としてもカザフ人の県になっていった。このような歴史的背景は、さまざまな対立を生み、牧地など牧畜資源をめぐるオリアンハイ人との潜在的競合が存在してきた。

しかしながら、社会主義時代以降、カザフ人が大多数を占める土地であるバヤンウルギー側とほとんどの住民がオリアンハイ人であるホブド側は、双方の牧地を融通しあう公的な協力体制を構築してきた。このような行政の境界を越えた牧地利用の協力関係は、モンゴルの他の地域でも見られる。例えば、トゥブ県の9つの郡では、牧地相互利用の協定を結んでそれを実施してきた。トゥブ県は、四季それぞれに適した土地^{*4}をすべて持つ郡はすくない。ある郡では冬営地に適する場所が足りず、別の郡では夏営地の場所が足りない。そこで、郡相互に足りない営地や牧地を補いあってきた。

本論文の対象地域であるバヤンウルギー側とホブド側にも、牧地利用の協力関係の基盤となる、つぎのような生態的条件のちがいが存在する。現在のモンゴルと中国の国境、またモンゴル国におけるバヤンウルギー県とホブド県の境界は、その大部分がアルタイ山脈の分水嶺に沿って引かれている。西にむかって分水嶺つまり県境と国境を越えるほど降雨量は増える。とくに冬季、バヤンウルギー側は降雪量がおおいのに対して、ホブド側はすくなくヒツジなど小型家畜の放牧に適している。積雪がおおいと小型家畜は雪をかき分けて草を食べることができない。それに対して、バヤンウルギー側は春季の雪解けが早く草の生育が早くはじまる。このような生態条件の違いから、バヤンウルギー側の牧畜民は、

冬ホブド側の放牧地の一部を利用させてもらい、ホブド側は春バヤンウルギー側にある牧地を利用させてもらうという協力関係を構築してきたのである。

この関係は、社会主義時代が終わり、牧畜経営が牧畜協同組合から個人によって行われるようになる1990年代以降も、郡役場間の協定のかたちをとって維持された。ただし、近年住民レベルで他郡の牧畜民の牧地利用を拒む例が多く見られるようになっている。その理由として、政府の市場経済化政策だけでなく、国際機関による牧畜開発プロジェクトの影響、家畜頭数の増加をあげることができる。あとでまた述べるように、これらは、所有や行政の境界を越えた、牧畜における協働をできにくくしている (Kamimura 2013; 上村 2016b)。

Ⅲ 調査の方法と事例

調査は、冬季の牧地相互利用について、とくにボルガン郡から、ドート郡またはムンフハイルハン郡への家畜の移動について、2018年2月1日から2月6日の間に聞き取り調査を行った。境界を越えて牧地を利用するということは、すなわち境界を越えて家畜を移動させることである。

調査の当初の計画は、ボルガン郡に家畜が帰る移動を観察することであったが、家畜をドート郡またはムンフハイルハン郡に移動させていたほとんどの世帯は、1月の中旬までに家畜をボルガン郡に帰っていた。例年なら3月に家畜を帰す。しかし、ドート郡とムンフハイルハン郡には、前年の夏から秋にかけて、干ばつの影響をよりつよく受けたほかの郡から家畜が大量に入ってきたため、例年に比べて草の量がすくなかった。その一方でボルガン郡には雪が例年のようにはおおく降らなかったため、家畜を例年より2か月ほど早く帰したのだ。まだボルガン郡に家畜を帰していない世帯もあったが、例年にない厳冬で零下40℃の日がつづくなか、通常なら冬でも通行可能な道が氷で覆われるなどしており到達できる世帯は限られていた。

本論文では、聞き取り調査を行った21世帯から、そのうちの4世帯についてくわしく取り上げる。また、この調査の追跡調査として、2019年2月21日から26日にふたたび聞き取り調査を行った。なお、ボルガン郡では、1996年7月から8月に1か月間、ドート郡では1993年から1996年の間に合計2年間の参与調査を行っている。

最初の事例は、ボルガン郡の複数のカザフ人世帯が家畜をまとめてドート郡に移動させ、オリアンハイ人の牧畜民に預ける事例である。

【事例1】HBさん(男49:カザフ人:Ители氏族)ボルガン郡第1村

HBさんは、社会主義時代から2009年まで最大1,300頭の小型家畜(ヒツジ・ヤギ)を追って、6人でドート郡にオトル移動(雪冷害(ゾド)や干ばつからの回避や越冬にそなえて秋に家畜を肥らせるなど、牧畜の特定の目的のために家畜を機動的に移動させ放牧する移動)を行っていた。「ホシ」(xosh) とよばれる簡易ゲル、野営に必要な道具や食料をラクダ4頭に積み、犬2頭が同行した。ホシは、30分で組み立て・解体ができ、なかに設置するストーブなどとも

にラクダ2頭に積める。行きは、6人で行き、2人が残り、1か月经つと別の2人が来て2人が帰るというようにひと月交代で放牧していた。オトルの期間が終わり、ボルガン郡に帰るときは、4人がやって来て6人で帰った。

HBさんは、2010年から家畜をドート郡の牧畜民世帯に預けるようになった。その年、当初は自分たちで放牧するつもりでドート郡にやって来たが、冷害(ゾド)が発生し、ドート郡の役場が指定した営地(日帰り放牧のベースキャンプ)はよい冬の営地ではなく、家畜が弱り、ほかにすべがなくなって、ドート郡の6世帯に預けることにした。それ以降毎年預けるようになった。

今回は、2017年10月27日にボルガン郡を出発し、2018年1月17日に帰って来た。ドート郡の牧地の状態がよくなかったために、予定より早く帰ったのである。11世帯の家畜をまとめた2,000頭を移動させた。各世帯の代表11人がボルガン郡からドート郡への移動に参加した。追って行く家畜の種類は、小型家畜(ヒツジとヤギ)だが、寒さに弱い子ヤギは連れて行かない。道中標高の高い峠を越えるからだ。毎日の移動は、2,000頭を1,000頭ずつ2つの群に分けて移動する。行きも帰りも、道中ホシに4泊した。

契約については、秋預ける世帯に行って口約束を交わすが、最近は電話で話して決めることもある。報酬は、行きに2か月分の報酬(ひと月1頭あたり1,000トゥグルグ;2018年1月時点1円=22トゥグルグ)を預ける世帯に渡し、帰りに家畜の数を数えて残りの2か月分の報酬を払った。

預ける側と預かる側の関係は、多くの場合相手が決まっており持続的な関係である。両者の世帯主(男性)はお互いを「ターマル」と呼び合う。

この事例では、冬、HBさんが中心となってカザフ人世帯の家畜を統合し、ドート郡に移動させ、到着後それぞれの世帯の家畜に分ける。そして、各世帯の代表者が、個人的なターマル関係にある世帯まで家畜を追って行きその世帯に預ける。預かったオリアンハイ人は、自分の家畜と統合して放牧を行う。そして、春、預けた各世帯の代表者がドート郡にやって来て、預けていた世帯からそれぞれの家畜を受けとると、ほかの世帯の家畜とふたつの群に統合し、ボルガン郡まで追って帰る。

移動させる小型家畜は、ヒツジと成長したヤギだけだという。小型家畜は、雪が深く積もると雪をかき分けて草を食べることができないので、雪の少ないドート郡側に移動させる必要がある。しかし、ヤギは体脂肪が少なく、子ヤギはとくに寒さに弱いので峠を越える移動に耐えられない。標高3,175mの峠1を越え、道中4泊するからである。子ヤギを連れて行かないのは、社会主義時代の移動についての聞き取りでも同様だった。県境を越えてボルガン郡からドート郡またはムンフハイルハン郡へ移動するルートは限られている。図1に示した4つの峠のどれかを通らなければいけない。峠2は3,125m、峠3は3,023m、峠4は3,461mと、いずれも3,000m以上の標高である。

「ターマル」は、カザフ語の“тамыр”で「友人、あるいは親しい友人」を意味する。2018年春の調査の時点では、カザフ人が、カザフ人同士やロシア人やモンゴル人の取引相手に対して用いる言葉らしかった。



写真1 ホシの外観

筆者撮影



写真2 ホシの内部

筆者撮影

なお、2019年春の調査では、2018年の冬から2019年の春にかけて、HBさんは、例年のように小型家畜をドート郡に移動させなかった。2017年とおなじく、ドート郡には、2018年の夏から秋にかけて、干ばつの影響をよりつよく受けた近隣の郡から家畜が大量に入って来たため、草の量が少なかった2017年に比べてもさらに少なかったからである。そのうえ、2018年9月のドート郡議会で郡の外部から家畜を受け入れないことが決議されていた。

つぎの事例は、ボルガン郡のオリアンハイ人が、カザフ人の家畜を預かり、ムンフハイルハン郡に移動して放牧する事例である。

【事例2】ChOさん(男50:オリアンハイ人) ボルガン郡第5村

2010年から、ムンフハイルハン郡に放牧(オトル)に行くようになった。妻の Stさん(48)は、ムンフハイルハン郡から嫁いで来たので、親と親戚の関係を媒介に、ムンフハイ

ルハン郡の牧地を使わせてもらっている。2009年（から2010年にかけて）の大雪（ゾド）のとき、ヤクだけをムンフハイルハン郡に移動させた。翌2010年からムンフハイルハン郡で小型家畜も越冬させるようになった。そうして、ラクダ3頭を購入、2011年からゲルをラクダに積んで移動するようになった。

2017年はカザフ人の家畜は預からず、オリアンハイ人だけ4世帯の家畜を預かった。報酬の標準は、ひと月1頭あたり、カザフ人の家畜が1,000トゥグルグ、オリアンハイ人の家畜が800トゥグルグであった。自分の所有家畜は、ヒツジ・ヤギ340頭、ウマ20頭、ウシ100頭、ラクダ5頭、4世帯のヒツジ・ヤギの合計は600頭だった。ボルガン郡のバヤンゴルという場所から、雪が降った2017年11月8日 ムンフハイルハン郡に移動したが、11月18日ドート郡に移動、12月20日またムンフハイルハン郡にもどり、3・4日経過した12月25日に同郡の別の場所に移動、1月29日に出発6日間かけてボルガン郡の自分の冬営地にもどった。

2016年は、カザフ人4世帯オリアンハイ人4世帯の合計1,400頭の小型家畜を預かった。例年なら10月15日ごろ雪が降ってからドート郡に移動するが、この年はボルガン郡に家畜伝染病が出て非常事態が宣言され、郡の外に家畜を出すことが禁止された。しかし、ウマの胸の高さまで降る大雪（ゾド）になったため禁止令が解かれ、12月1日にムンフハ



写真3 ChOさんの冬営地

筆者撮影



写真4 冬営地の物置と子家畜囲い

筆者撮影

イルハン郡に移動した。今年（2017年から2018年）は、その反対に雪が少ない。山にも雪がなくこの時期に山肌が見えるのは今までなかったことだ。ムンフハイルハン郡で放牧し、2017年3月23日に帰還した。報酬は2017年から2018年の冬と同じであった。

この事例は、オリアンハイ人のChOさんが、ボルガン郡内でオリアンハイ人とカザフ人の家畜を統合し、妻の実家のあるムンフハイルハン郡に移動し放牧した事例である。牧地は県の境界を越えて利用されるが、家畜を預かり預ける関係はボルガン郡内で成立し完結している。

表1で分かるとおり、事例1の第1村には、オリアンハイ人はいないのに対して、この事例の第5村では、ほぼ5人に1人がオリアンハイ人である。村（バグ）番号は、社会主義時代の牧畜協同組合の下部組織ブリガード（生産大隊）の番号と一致し、北の第1村から順番に並んでいる。南に行くほどオリアンハイ人比率が高いことが分かる。ここのカザフ人は、オリアンハイ人であるChOさんに家畜を預けることで、彼の妻の親族関係を介し、ムンフハイルハン郡の牧地を利用していると言える。

2018年から2019年の冬、ChOさんは、自分の所有する家畜と、いつも移動をともにしている年上の友人が所有する家畜の2世帯の家畜だけをムンフハイルハン郡に移動させ、ほかの世帯の家畜を請け負うことはなかった。彼は、直接口に出して言うことはなかったが、ムンフハイルハン郡でも郡の外部からの家畜の受け入れに対する圧力が強まってきているらしい。

表1 A郡の各村のオリアンハイ人比率

村番号	1	2	3	4	5	6	7	A郡全体
オリアンハイ人比率 %	0	0	2.2	8.7	21.3	49.0	40.5	16.5

（2017年統計：郡役場）

つぎは、事例2とは反対にボルガン郡から家畜を受け入れる側からの聞き取りである。

【事例3】BEさん（男24：オリアンハイ人）ムンフハイルハン郡

2017年11月6日、ボルガン郡フフトルゴイのオリアンハイ人ChBさんら4人が1,200頭のヒツジ・ヤギを、タスという場所にあるBEさんの父が保有する冬営地に連れてやって来た。この家畜は、ChBさんの200頭を含む11世帯所有の家畜であり、そのうち1世帯がカザフ人世帯であった。家畜群の世話は、BEさんとChBの息子のふたりで行い、報酬としてそれぞれ50万トゥグルクを受け取った。預かった家畜がボルガン郡にもどったのは、2018年1月21日だった。

BEさんは、ヒツジ・ヤギ約50頭とウシ約25頭、ウマ約20頭を所有する。ヒツジ・ヤギは、父と兄2人のヒツジ・ヤギと統合し、これら合わせて4世帯、約1,200頭の1群を4人が15日交替で放牧する。気候が通常の年は年間10回ほど移動する。

タスにある冬営地には、ヒツジ・ヤギ混成群が夜寝る家畜囲いがふたつある。このような営地をモンゴル語でイヘル・ボーツ（双子の営地）という。ボルガン郡から預かった家畜の

ほか、BEさんら4世帯のヒツジ・ヤギ1,200頭の群も、おなじ冬営地のもう一方の家畜囲いを寝場所にしていた。BEさんたち4世帯の群とボルガン郡から預かった群は、朝それぞれ反対の方角に出して放牧される。

この前年、2016年11月31日から翌年3月10日までは、ボルガン郡ホジルトのオリアンハイ人Ashさんが連れてきた600頭のヒツジ・ヤギをアビルトという場所で預かった。自分たちのヒツジ・ヤギ1,200頭は、ブルグという別の場所に放牧していた。

2017年3月1日(旧正月3日目)から6月20日、ボルガン郡ホジルト川の上流ヌツゲンという場所に、BEさんと父、兄2人の4世帯の家畜のうち、母畜と子畜以外のヒツジ・ヤギ500頭、ウマ45頭、ウシ95頭を放牧した。これらの家畜の移動は、BEさんが冬営地から途中イフ・ハグという場所にホシで1泊して行った。

この事例は、事例2と同様ボルガン郡のオリアンハイ人が、カザフ人も含めた知り合いの世帯のヒツジ・ヤギを集めてムンフハイルハン郡側に移動させる例といえる。それをムンフハイルハン郡の家畜を預かる側から見ている。また、事例1のカザフ人とオリアンハイ人の固定された関係とは異なり、この事例のように事例2と違って親族関係のないオリアンハイ人同士の場合、預ける相手と預かる相手の関係は固定されていないように見える。さらに、1,200頭という4世帯のヒツジ・ヤギの群の大きさから、年間10回以上と移動回数が多く、その年の冬の状況によって営地や家畜の預かり方も、柔軟に変えていることが分かる。また、ボルガン郡からの家畜を冬預かるだけでなく、自分たちの家畜も春ボルガン郡側に移動させている。

この事例では、その時々、自然条件、預かったものを含む管理する家畜の数と種類といった条件、さらに人的ネットワークなど社会的な条件によく適応し利用している。その結果として、時系列的に様々な牧畜の形態が現れるのである。

つぎの事例も、家畜を受け入れる側のドート郡の牧畜民からの聞き取りである。ただし、家畜を受け入れるのではなく、ボルガン郡側に自分の家畜を移動させる例である。

【事例4】TCさん(男53:オリアンハイ人) ドート郡

最近の5年間は、4月20日ごろから6月1日まですべての家畜をオラングワール岬の向こう(ボルガン郡)に移動させている。去年も、ドート郡に草がすくなく7月20日から10月5日まで、ボルガン郡の数か所を移動した。その間、ミネラル(хүжир) 補給のために、ドート郡のツアヒルに8月20日から9月5日まで、小型家畜と乳ウシだけを連れて帰った。また、1週間後、ほかの3世帯といっしょにボルガン郡のサイハンに行く予定だ。

現在の所有家畜は、合計2,000頭。今年はヤギ500頭を700トゥグルグ(ひと月1頭あたり)でドート郡の知り合いに預けている。その知り合いは、それを自己所有の家畜100頭といっしょに飼っている。ヒツジとヤギの合計500頭は、自分と息子で飼っている。そのほかヒツジ250頭をカザフ人に預けてある。家畜を預ける料金は、ドート郡の中なら700トゥグルグ、ボルガン郡の世帯なら1,000トゥグルグである。ウシ300頭とウマ50頭は、

現在もボルガン郡のサイハンにいる。7日に1回見回りに行く。つぎは2月7日に行くつもりだ。旧正月4日になったらほかの家畜もすべて、ボルガン郡に移動させる。

郡の中に外部の家畜を入れないという郡議会の決定は支持する。それが相互的であり郡の外に(自分の)家畜を出さないことであることも理解している。しかし、自分の家畜は変わらず外に出すつもりだ。公に決めたことと個人とは別なのだ。

TCさんは、所有する家畜数がドート郡で一二をあらそう。車はランドクルーザー80型(牧畜民の間でモンゴルの地方の自然条件に最も適した車だと評価されている)を含む2台を所有し、ホブド市内やウランバートル市にもアパートを所有するもっとも成功した牧畜民のひとりである。彼は、ボルガン郡に恒常的に家畜を留め、自分がいない時は、ボルガン郡側のHBさんを含む複数のターマルと電話で毎日連絡を取り、自分の家畜の様子を確認する。

ここにもメディアの変化がターマルの新しい形態を生み出しているのを見ることができる。ドート郡は、山岳地帯であるため携帯電話の通じるエリアが限られていた。しかし、最近、G-Mobileというモンゴル資本の携帯電話会社がCDMA 450MHz回線の中継塔を増設し、利用者側の八木アンテナの普及もあって、谷の底でも通話が可能になった。ゲルの外壁に結びつけられた八木アンテナは、ゲルの内部に置かれている「固定」電話につながっている。電話による家畜のモニタリングによって、家畜をあずける鬩はひくなくなった。新しい技術・メディアの使用によって、預けた家畜の状態を常時把握し、状況の変化に対応できるようになっただけでなく、ターマル同士も日常的にやりとりするようになったのである。

外部の家畜を郡内に入れないという議会決定に対する彼の反応も、一般的なものと言える。とりあえず目先の自分の利益を確保し、自分に不利なことは考えないでいくというのは、全国の牧地問題をつうじて牧畜民によく見られる反応である。

IV 自然と世帯の条件から生まれる多様な協力の形態

まず、上の事例から、この地域における冬の牧地利用における協力関係(境界を越える家畜移動)の変遷をまとめておこう。社会主義時代、ボルガン郡の牧畜民は、冬季、家畜をドート郡またはムンフハイルハン郡へ移動させ、自分でオトル放牧していた。営地や牧地は、受け入れ側のドート郡またはムンフハイルハン郡が指定していた。1990年代初め、牧畜協同組合が解体され、金銭を報酬として家畜を放牧してもらう家畜預託や営地の貸借がモンゴル国に浸透しはじめた。金銭を媒介にした家畜預託や牧地借用によって県境を越える上の事例のような形態は、調査地では、2000年代末から出現した。

その契機となったのは、2009年から2010年にかけての大雪や冷害(ゾド)だった。冬営地には、日照が十分あり風を避けられる暖かい場所で、家畜の糞が厚く堆積していることや家畜囲いがあることが求められる。ドート郡またはムンフハイルハン郡が指定する営地は、地元の牧畜民が夏営地として利用する、冬営地には適さない場所だった。2009年から2010年にかけての大雪(ゾド)の際、その悪条件が顕在化したのだ。

事例1のHBさんは、つぎのように語る。「家畜をドート郡に預けるのは、自分たちにとって利益になる。悪い土地や寒い土地で家畜を弱らせるより、金を払ってでもよい土地に預けた方がよい。」彼から見れば、家畜預託の報酬には、家畜を管理してもらう労働力への報酬だけでなく、よい牧地を間接的に利用する料金も含まれているのである。ただし、HBさんとともにドート郡に家畜を預けた牧畜民のなかには、できたら元のとおりで自分たちでオトル放牧をして、報酬を払わずに済ませたいと言う者もいる。このような見解の違いは、現金にどれだけ余裕があるかに関係しているのかも知れない。

最初のふたつの事例を比較すると、ほかのさまざまな可能な形態も見えてくる。家畜を預けるか（家畜預託）、預けないか（オトル放牧を自分でする）の選択のほか、預ける場合、誰に預け放牧してもらうかで、郡内の人間（事例2・事例3）か郡外の人間（事例1）かの区別がある。そして、預ける場合には、家畜預託の報酬が、預けない場合は、営地とその周辺の牧地を借用するための対価が発生する。それらは、金銭で払われる場合もあるし、事例2のように親族関係によって相殺される場合も、あるいは金銭の代わりに労働力が提供される場合もある。さまざまな形態のなかで、例えば、ムンフハイルハン郡の聞き取り調査では、ボルガン郡のカザフ人が、毎年のように金銭を払って郡内の営地を借りオトル放牧を行っている事例も聞いた。

これらの事例で、家畜はエスニックな境界をどう越えるのか。事例2と事例3の場合、家畜の移動は、まず郡内でエスニックな境界を越え、つぎに行政の境界を越える。これに対して、事例1では、まず行政の境界を越え、つぎにエスニックな境界を越える。この3つの例では、家畜がエスニックな境界を越えるとは、それを飼育する主体が一方のエスニックからもう一方のエスニックへと変化するということである。しかし、家畜を所有する主体は変わらない。それに対して、事例4やカザフ人によるボルガン郡からドート郡あるいはムンフハイルハン郡へのオトル移動では、牧畜民と家畜は、行政の境界だけを越えて移動する。しかし、行政の境界は、ボルガン郡がカザフ人の土地と認識され、ドート郡とムンフハイルハン郡はモンゴル人の土地と認識されているというように、エスニックな境界と重なるのである。

また、カザフ人が家畜預託の報酬を払うかわりに、預け先のモンゴル人世帯に泊まり込み、家畜の放牧をしたケースも聞いた。事例1とは別のボルガン郡のカザフ人の若者2人が、2017年2月20日に預けていた家畜を取りにドート郡に行ったところ、家畜を預けた世帯主が旧正月の買い物のために県都に行きたいというので、15日ほどかわりに放牧をしたのだと言う。その間はもちろん残った家族とひとつのゲルで寝食を共にした。

この事例では、ドート郡の家畜を預かった世帯にも聞き取りをしている。この世帯の主人PJさん（男性40代）は、軍事アカデミー（士官大学）の政治将校養成学科に学んでいたが、1990年代初め社会主義とともに学科が消滅し中退してドート郡にもどって牧畜民となった。しかし、市場経済化と自然災害により家畜を失って、県都のホブド市に出て白タクをやって数年暮らしていたが、県都での生活もうまく行かず、親戚等からの援助を受けて、またドート郡にもどってきたのだ。このような経歴のためか現在でも県都にひんぱんに行き来し、訪問時も妻だけが家にいた。家畜を預けた側のカザフ人からは、預けた家畜が受

け取り時には20頭あまり少なくなっていたと聞かされていたが、そのことについては、相手の気持ちを害する(эвгүй)ので聞くなと同行者からくぎをさされていた。減った家畜の補償は結局うやむやになり、預けた側は預ける前に約束していた当初の家畜頭数の料金を払ったということだった。

私が、カザフ人を家族の一員のように生活のなかに深く受け入れることは、たまたまそうしなければならない状況になったからであり、稀なことではないのかと発言すると、同行していたこの郡出身でホブド大学のM・ガンボルド氏と隣のムンフハイルハン郡出身の運転手は、よくあるケースだと即座に否定した。妻も首を振る。結局、牧畜に関して、どのような協力関係であれ、カザフ人だからといって排除することはないのだと言う。

しかしながら、事例2のように、カザフ人とオリアンハイ人とでは、家畜預託の報酬がこととなり、2017年にはオリアンハイ人の家畜を優先的に預かっていることから、相対的な違いが存在しているのは確かだ。それは、社会的な距離の遠近と言ってもよいだろう。

以上述べてきたように、自然と世帯の条件が交錯しあって多様な協力の形態が生まれるのである。

V 行政の役割——越境の奨励から制限へ

これまで述べてきたようないわばインフォーマルな協力関係に対して、行政や法制度における協力関係を支援するフォーマルな仕組みについて、つぎに見ていこう。最初にモンゴルにおける土地制度の歴史を概観しつつ、行政の役割の変化について考察する。

現在のモンゴル国の地域では、17世紀清朝の支配下に入り盟旗制度に編成されるまで牧地に明確な境界はなかった。盟旗制度ができてからも、盟の境界が定まるまでにはかなりの年月がかかっている(岡 1988)。盟や旗の境界が定められたとしても、測量による地図が作成されたわけではなく、境界にはひろい解釈の余地があった^{*5}。1860年代になり測量による旗の地図の作成が清朝によって命じられてはじめて、境界は明確なものに変わったのである(上村 2014)。しかし、それは牧地紛争を顕在化させることでもあった。現在でも、牧畜民のおおくが、明確な牧地の境界の画定は、かえって紛争を引き起こすという。一方、国際援助機関がモンゴル国ですすめる牧畜部門の開発プロジェクトは、牧地の悪化と牧地紛争をなくすためには明確な境界が必要だという経済学上の信念に基礎をおいている。

清朝時代、盟旗制度が完成してからも、災害時には、政府は行政上の境界を越える家畜の移動を積極的に奨励してきた。歴史文書からは、受け入れる旗がさまざまな口実をならべて断ろうとするのを、盟が「人道的な理由」から受け入れをうながす過程が読み取れる。受け入れる側も自分たちがいつか逆の立場に立たされるかもしれないことをよく理解していたのであろう。

社会主義時代、郡(ソム)という行政単位が旗よりもせまい領域で作られた。郡は、牧畜協同組合(ネグデル)という経営単位と実質的に重なる。これが、上でも述べた郡間で四季の営地を融通しなければならなくなった原因のひとつである。また郡と牧畜協同組合が作られてからも、ほかの郡に冬営地をもつなど、これらの境界と世帯が牧畜をおこなう領域

は必ずしも一致していなかった。

しかし、現在この状況は変わりつつある。ドート郡では、選挙民である地元牧畜民の要求を背景に、2018年秋郡議会で外部の郡からの家畜を郡内で放牧させないことを決議した。地元牧畜民の要求とともに、この郡では、2000年代からスイス開発協力庁（SDC）の Green Gold プロジェクトが実施され、牧地利用者グループに牧地を保有させる試みが行われてきた^{*6}。SDC-Green Gold プロジェクトは、もともと中国の草原法をモデルに、牧地利用の空間的社会的境界を明確にし、プロジェクトによって組織された牧畜民グループに牧畜資源への所有権をあたえる法制整備をすすめようと活動する。郡議会の決議には、このような国際援助機関の理念を代弁する郡のプロジェクト・コーディネータの発言がおおきく影響している。

上に述べたドート郡の郡議会の決議にもかかわらず、今年（2018年）はボルガン郡の牧地の状態が悪かったため、小型家畜5千頭を11月15日から翌年の2月15日まで受け入れた。しかしながら、前年のボルガン郡からの冬季の2万頭の家畜の受け入れに比して、今年はその4分の1だった。このように、受け入れ家畜の頭数の制限というかたちで、外部の家畜を受け入れない排他性が、年々たかまっているのである。

それでも今のところ、親族関係による家畜委託や牧地・営地の借用は、行政もなかなか禁止できない。また、家畜を受けてもらう側と受け入れる側の立場が逆転することも理解されている。ホブド郡とボルガン郡との間で交わされた協定書には、5千頭の小型家畜のバーターとしてボルガン郡が春ドート郡のウマやウシの大型家畜を受け入れる事項が盛り込まれた。

親族関係による行政の境界を越えた牧地利用に見られるような実践は、社会的境界の多孔性（porosity）を示していると言えるだろう。これは、環境の変化に対応するための「柔軟性」のひとつの形態である。牧地利用者の社会的境界の多孔性について、Fernandez-Gemenez（2002: 70）は、モンゴル国バヤンホンゴル県での例をもとに、「バグ（モンゴル国における最小行政単位）の住民はそのバグの牧地に対して対価なしにアクセスできるが、近隣にすむ彼らの親類は現金、労働、現物を対価として牧地にアクセスでき、親族関係のない外部者はさらなる対価を必要とする」と指摘している。

このように、二次使用者による牧地の利用は一次使用者によって管理されるにもかかわらず、開発プロジェクト関係者など外部の人間によって、この多孔性が牧地利用をコントロールする制度（institutions）の「欠如」としてとらえられてしまう危険性が、アフリカの乾燥地帯の研究で指摘されてきた（cf. Niamir-Fuller 2000: 117）。それとおなじような状況が本論の調査地にもみられるのだ。

VI ターマル—— 打算・規範・記憶

上のような多孔性にエスニックな要素のからむ例が、本稿のカザフ人とオリアンハイ人の間の友人関係ターマルによる家畜委託と言える。事例1で見たとおり、カザフ人がオリアンハイ人に家畜を預託する時、世帯主である男性同士の「ターマル」と呼ばれる友人

関係がおおくの場合構築される。これは、カザフ人とオリアンハイ人との間のエスニック境界を越える協力の関係が、長期にわたり安定的に維持されるための仕掛けといえる。Humphery and Sneath (1999: 136) は、内陸アジアにおいて、社会主義時代が終わり、牧畜が脱集団化された結果、親族および親族ネットワークの重要性が増加したと述べる。ターマルも、公的な制度の効力がうすまる傾向があるなかで、親族関係をある程度代替し、信頼関係をつよめるものとして、機能していると考えられる。一方で、それが単なる表面的で口先だけの打算による関係だとする見方も現地にはある。この章では、ターマル関係について、それがいかなる目的と論理で構築されているのか考察する。

ラドロフのチュルク語方言辞典によれば、「ターマル」つまり“тамыр”とは、「(植物の) 根」、「(血管などの) 管・脈」を意味する語である。この語意は、チュルク系諸語にひろく共通しているが、カザフ語だけに「友達」の意味が加わる(Радлов 1893: 999)。社会主義時代モンゴルで出版された『カザフ-モンゴル語辞典』にも、「友人」「親しい朋友」の意味がある(Базылхан 1984: 295)。モンゴル人がモンゴル語でこの語を書き写すときには、“таа мар”と綴り、日本人の私の耳にもそう聞こえるので、本論では「ターマル」とカタカナ表記することにする。

ちなみに、モンゴル語でターマルに近い語には、「アング」(анд) がある。この語は、『モンゴル秘史』でテムジンとジャムカとの関係に言及するときに登場し、「盟友」や「義兄弟」を意味するが、現在あまり使用されることはない。これに対し、ごく一般的に用いられるのは、「友人」にあたる“найз”であり、現代のモンゴル語には“анд”にあたる特別な友人を示す言葉はないといってよい^{*7}。カザフ人が、エスニックを越えた関係のなかに、ターマルという言葉によってことさら特別な友人関係を構築しようとすることは、この地の彼らが比較的新参者であることと関係しているのではないかと推測される。

1. ターマル: 言葉の濃度

私の1993年からのホスト・ファミリーのOBさん(男69: ドート郡) は、ボルガン郡からドート郡への家畜預託に伴うターマル関係についてつぎのように論評する。

カザフ人は、悪意があって手ごわい人々だ。自分にもふたりターマルがいる。しかし、彼らが本当のターマルかというところとは言い切れない。今年、そのうちのひとりのIPが、ボルガン郡の設立(70周年)の記念祭に泊りがけで来いと誘ってくれたが行かなかった。デルーン郡(ボルガン郡の北隣の郡)の記念祭に、ドート郡から行った人たちは冷遇された。デルーン郡のカザフ人は、(ボルガン郡のようにドート郡に家畜を移動させなくてもよいので)モンゴル人を必要としないからだ。カザフ人は、ターマルという言葉でオリアンハイ人を利用しようとしている。GS(私のもうひとりのホスト)がHB(事例1参照)にむかし預けたウマのことは聞いているだろう。HBは、GSのターマルということになっているが、GSがHBの元に預けたウマは、死んだりいなくなったりしてみんななくなったということだ。しかし、実際はどうであったかは考えればわかるだろう。自分が考える本

当のターマルとは、困難な状況とともに乗り越えた者どうしだけがなれるものだ。(2018.8.9)

1993年9月、私がOBさんのところにいた時にも、彼のターマルであるバヤンウルギー県ボルガン郡第2村のエリスベイ(Лесбэй)さん(男:Секел氏族)がやって来たことがある。都市ではなく地方で牧畜生活をしているカザフ人を私が見た最初だ。OBさんは、犬が吠え子供たちが大声で呼ぶのでゲルの外に出ると、谷の上流にまだ黒い点に見える来訪者をあごで指して、あれは自分のターマルの誰々だと言った。カザフの黒い外套を着てふとい革のベルトを締め、特徴的な帽子をかぶったその姿は、谷の下流のかなり離れた距離からでもはっきり目立ち、いつもの見慣れた空間に「異質」なものが入って来たという感覚が生まれた。OBさんのターマルは、ゲルの中に入り、なまりのあるモンゴル語オリアンハイ方言で家畜やゲルの位置、知り合いの消息などの情報を交換し、しばらく話してから下流に去って行った。その会話から、いなくなった家畜を捜索しに、ボルガン郡から峠を越え、谷を下ってやって来たと分かった。OBさんとは、家畜の捜索のため、お互いの家をこうして泊りもふくめ何度か訪問しあっているうちに、ターマルになったという。この時もOBさんの妻が、ゆっくりして行け、帰りは泊まれとすすめたが、別のルートをとったらしく、帰路の訪問はなかった。

このように、家畜の捜索のようにお互いに協力しなければならない状況はかならず生まれる。カザフ人もオリアンハイ人も大型家畜のウマやラクダ、オスのヤクは、ヒツジ・ヤギの小型家畜のように日帰り放牧をせず、放し飼いになっているので、居場所が分からなくなることよくある。また、30年代と40年代の一時期をのぞいて、清朝政府とモンゴル政府は、基本的にカザフ人の入植を支持して来た。とくに、社会主義時代は、民族共存が建前として前面に押し出されていたので、カザフ人を排除することはタブーとされていた。

OBさんの「カザフ人は、悪意があって手ごわい人々だ」という発言は、民主化以降モンゴルが市場経済に移行し、経済的損得が人々の行動を支配しはじめ、民族主義的な発言が表立ってできるようになった状況を反映している。ほかのオリアンハイ人やモンゴル人からは、「カザフ人は、戦争になったら真っ先に自分のターマルを殺す」とも何度か聞かされた。モンゴル人のターマルはカザフ人側の自分や仲間の情報をよく知っているので、最初に殺すのだという。

「GSがHBにむかし預けたウマ」には、説明が必要だろう。2000年代の初め、GSさん(男40:ドート郡)は、やはり家畜を探してボルガン郡に行った時、乗っていたウマが疲労して動けなくなり困っているところをHBさん夫妻に助けられた。以前から知り合いという意味でのターマルだったが、この事件をきっかけに二人はより深いターマルになったのだ。「むかし預けたウマ」とは、2003年にGSさんが、ドート郡から年老いたウマを買い取り、HBさんにカザフ人に売ってくれるように託したウマのことである。当時GSさんの家に居候していた私は、彼が「これからウマの商売をはじめると興奮気味に話していたのを記録している。11月の後半から12月のはじめ、モンゴル人もカザフ人も、合計数十頭の



写真5 OBさんとカザフ人のターマル、コズバイさん(男:セケル氏族)から贈られた敷物
市場では一枚がモンゴルの通貨で百万トゥグルグ、日本円にして4-5万円の価値がある。子牛一頭が買える値段だという
筆者撮影

家畜を屠殺して春から夏が始まるまでの食糧を準備する。冬は草がなくなり家畜の体重は減る一方だが、このころ一日の最高気温は0度を下まわり肉の保存が可能になるのだ。ウマやウシも通常各世帯1、2頭を屠殺する。モンゴル人はウマを愛するので殺したがるのに対し、カザフ人はウマのあばらの肉の腸詰カズ(казы)を作るなど馬肉の需要が大きい。このようにエスニックな差異を利用し、GSさんがオリアンハイ人から年老いたウマを買い取り、HBさんがカザフ人にそれを売るといふ。興味を持った私は、以降何度もこの「ビジネス」についてGSさんについて尋ねたが、いつも詳しく語ってくれなかった。OBさんは、GSさんの買い付けたウマをHBさんが勝手に処分してしまったと示唆していた。ウマのビジネスの話は、HBさんへの疑念を顕在化することになる。それは、ターマルの解消につながるかもしれない。

しかし、GSさんは、今もHBさんがターマルであることに変わりはないと言う。2012年私は彼とともにHBさんの夏営地を尋ね、家に1泊している。GSさんにターマルとはどんな関係かと質問すると、彼の父の事例を挙げて答えた。GSさんの父は、党幹部学校に学びホブド県のいくつかの郡の郡長(牧畜協同組合長も兼ねる)を務め、90年代の初めにホブド市の公設市場の長の職に就いてすぐに亡くなった。父には、2人のカザフ人のターマルがいて、よく家にやって来る盟友であったと言う。彼らは、幼いころからボルガン郡とドート郡との間を、家畜を移動させ行き来しているうちに知り合った。カザフ人は、自分のターマルにカザフの民族意匠の刺繍の施されたフェルトの敷物(сырмақ)をプレゼントする習慣があり、GSさんの父が受け取った2枚の敷物は今でも長兄の家にあると言う。GSさんのターマル観には、このような彼の父の記憶が強く影響している。

OBさんの語りに戻ると、彼はボルガン郡と北隣のデルーン郡のカザフ人のオリアンハイ人に対する待遇の差とGSさんとHBさんの関係を例に挙げて、「カザフ人は、ターマルという言葉でオリアンハイ人を利用しようとしている」と断じる。しかし、「本当のターマ

ルとは」と続けたように、ターマルについて規範意識は持っている。

では、一般のカザフ人は、カザフ語でターマルにどのような語感を持っているのであろうか。複数のカザフ人に聞き取りをした。まず、ホブド市の公設市場で靴の小売を営む、GSさんの姉の夫BRさん(52)に彼のターマルを紹介してもらった。電話してすぐに何人かのカザフ人が彼の店にやって来た。彼によると、このようにすぐに要求に応じてくれるのがターマルだと言う。

KBさん(カザフ人男62:Жантекей氏族)は、「ターマル」とはまず根を意味し、何代も受け継がれた(長くつき合った)よい友人のことをターマルというと話す。例えば、1990年代初めここに留学していたスイスのドイツ人ピーター・フィンケがそうだ。自分には、モンゴル人の100人のターマルがいるし、カザフ人のターマルもいる。カザフ人のターマルは、子供のころからの友人でお互いに助け合い、持っているものを分かち合う。ふだん電話であいさつを交わし、金、食物、家畜を与え合うのがターマルだ、と言う。フィンケ氏(Peter Finke)^{*8}は、1990年代初めホブド県のカザフ人の郡で牧畜のフィールドワークを行い、経済人類学の手法を用いた論文を複数発表している。ちょうど、学生を引率しての1か月の現地研修のため、ホブドに滞在中で、私はウランバートルからホブドに飛ぶ飛行機で彼らといっしょになった。彼はモンゴル語もしゃべるがカザフ語の方がずっとうまくしゃべれるとのことだった。

GLさん(カザフ人女47)は、ターマルは女どうしてもよいと言う。ターマルは親しい友人のことであって、カザフ人同士はターマルになれるが、カザフ人とモンゴル人の間では友人(дос)にしかなれない。さらに、自分の右腕の血管を指さしながら、ターマルとは血管のことで、血がひとつであることだと言う。

これに対し、MSさん(カザフ人男56:Ители氏族)は、民族外との関係がターマルであり、民族内の同様の関係には親戚を表わす“туыс”を使うと主張する。そして、やはりFinke氏の例を挙げ、ウランバートルで取引する中国人にも、ロシア人にも、スイスにも自分のターマルがいる。ターマルは、あれが欲しい、これが欲しいと相手が言ったら、即座に用立ててやる。長年の付き合いがあり、知り合ってすぐにはなれないと話す。彼もターマルは、血管がひとつ、つまり血がひとつであることを意味すると言う。民族内つまりカザフ人どうしのターマルの例は知らないと言いが、隣にいた彼の親戚のZNさん(男73)は、ターマルは、民族内でも使うとすぐに否定した。ターマルは、“дос”と同じく「友達」の意味で、同級生など同輩の友達には“жолдас”を使うとZNさんは言う。

1993年にドート郡で知り合ったADさん(カザフ人男50)は、ターマルというと、「血管がひとつ」であることを連想するが、“дос”よりむしろターマルの方が関係は弱い。民族内でも中国人やロシア人との関係にも使えると言う。また、友人としてのターマルという語は、現在ほとんど使われなくなっており古めかしい感じがする。今のカザフ人の若者の中にはこの語を知らない者もいるだろうと話す。

この語があまり使われなくなったことは、個人による解釈の振幅の幅を大きくしていると理解できる。本来その語が使用されることによって共有され強化される語意の強度がうすれ、それぞれの経験による解釈の余地が広がったのである。

しかしながら、ターマルの一定の共通の意味はつかむことはできる。ターマルは、長くつき合いのある友人で、相手の要求に即座に応えることが求められるのである。そして、カザフ人どうしても民族が違っているどうしても使える。GLさんの「カザフ人とモンゴル人の間は、友人（дос）にしかなれない」という発言は、ターマルの「血がひとつである」という解釈に影響されている可能性がある。

一方、MSさんは、カザフ人の中に（自分が連れて来たあるいは知り合いの）モンゴル人がひとりだけいて、「こいつはどうしてここにいるのだ」という発言が出た場合、「これは俺のターマルだ」と言ってみなにて了解してもらうことがあると言う。相手のモンゴル人は本当のターマルでなくてただの知り合いでもよい。このことは、ターマルという語が、便宜上の使用であれ、民族境界を越える仕掛けとして機能することを示している。これを裏づけるように、ネット上のカザフ-ロシア語辞典のひとつには、“тамыр”の意味として、「根」、「管・脈」などのほかに、“русский друг”（ロシア人の友人）という語意を、「廃れつつある語」として挙げている（<https://sozdik.kz/ru/dictionary/translate/kk/ru/%D1%82%D0%B0%D0%BC%D1%8B%D1%80/> 2019.8.2閲覧）。

2. ターマル：記憶の重力

ターマルが規範としてカザフ人とオリアンハイ人の協力関係に作用することは、以上から分かるだろう。しかし、どのように作用するのであろうか。

上に述べたMSさんのインタビューから分かるように、この語には、広い意味と狭い意味がある。このような言葉の意味の二重性は、多くの言語において単語の核となる典型的な意味とそこから派生する周縁的な意味があるように、一般的に観察できる。日常言語の単語は、深層の重く規範となる意味と、浅い表面的で軽い意味の両方を持っていることがあるのだ。

「ターマル」では、表層の意味がトラップとして相手にまず投げかけられ、重い深層の意味につなぎ止められると言えよう。この意味でOBさんの「カザフ人は、ターマルという言葉でオリアンハイ人を利用しようとしている」という言葉は正しい。しかし、主-客はいつでも入れ替わり、このトラップはかけたカザフ人も拘束する。

現在でも、GSさんの父と彼のターマルの関係のように濃密なターマルの関係が構築されることがある。ボルガン郡のカザフ人SDさん（男30：Секел氏族）は、小学4年生ごろから、父たちがドート郡に家畜を移動させるのについて行っていた。そして、そこでモンゴル語オリアンハイ方言を習得し、ドート郡に何人ものターマルができた。なかでも、BCさんとは、6、7年前から深いターマルの関係になった。ふたりは、贈り物を贈り合い、自分は相手に当歳馬を贈り、相手からはヤクー頭が贈られたという。どちらもかなりの価値をもつ贈り物である。SDさんによると、ターマルは連絡をいつも取り合い、お互いの家を訪問しあうだけでなく、いっしょに野生の果物を摘みにいったり、他家を訪れたりもする（2019.2.24）。

オリアンハイ人であるムンフハイルハン郡ハグ村のMTsさん（男40代）は、ボルガン郡第1村のBKkさん（カザフ人男40代）と10年来のターマルである。社会主義時代父どうしもターマルであったので、この関係は2代続く。毎年BKkさんの家畜を10月から翌年の旧正

月前まで冬預かる。2019年は、約230頭の小型家畜を預かったものの、報酬は受け取らなかった。同年5月初、家畜の出産を終え生まれたばかりの子家畜も含めすべての家畜を連れて、ボルガン郡の第1村に移動した。オトル用の小型ゲル、ラクダ5頭、夫婦2人と息子1人の3人で移動し、6月中頃、ボルガン郡で梳いたカシミアをラクダに積んで、ムンフハイルハン郡に帰って来た。さらに、8月15日再度草刈りのため、またボルガン郡にすべての家畜を連れて第1村に移動した。途中フフゴルで3泊、サイハンで7、8泊した。そして、10月初雪が降る前に、刈った草と集めた牛糞を積んで帰って来た。ボルガン郡にいる間、ターマルのBKkさんは、草のある場所を教えたり、飼料を提供したりして助けてくれた。夏ムンフハイルハン郡に帰って来てからも、羊毛の刈りとりや移動、またヤクやヤギの搾乳で人手が足りない時には、BKkさんに電話して手伝いに来てもらう。逆に自分も頼まれたら手伝いに行く。その関係は実の親族より密だ。冬も11月末越冬のための家畜をまとめて屠殺する時や家畜囲いに雪が吹きたまった時に来てもらう。ムンフハイルハン郡のハグ村やアラグ村の世帯のおおくは、県境の反対側のボルガン郡の第2村や第1村、第5村にターマルを持っている。南側の村の世帯も越える峠が異なるだけでおなじようにターマルがいる。このように、時には親族以上の親密さが築かれる。

また、ターマルの拘束力は、固定された規範としての「経典化」によるものではなく、記憶の重力によって作用すると言える。長年、モンゴルをフィールドとしてきた社会人類学者Humphrey(2012)は、ホスピタリティを“tone”の概念で分析しようとする論文の中で、モンゴルにおけるホスピタリティの規範“yos”について議論している。Humphrey(2012)は、“yos”を、主人-客との出会いの行動を「前もって」規定する、その「場」から引き離されて抽象性や非人称性をおびた、すでに構成されている「経典」として現れるとする。しかしながら、このような「経典化」の傾向は、1980年代からの民族文化復興の文脈でとらえる必要があろう。しきたりや慣習がモンゴル国民のものとして書籍に書かれはじめた時期に、Humphreyはモンゴルで聞き取り調査をしている^{*9}。規範はモンゴル・ナショナリズムの中で想像され、エクニクな境界を越えることができなかったであろう。ターマルにおける規範は、Humphreyの“yos”のような抽象的で非人称的な固定化された経典ではなく、個人の体験つまり記憶につよく基づいていると言える。深く濃密なターマルの関係を身近で見聞きしてきた体験が、重力として関係を拘束する力の源泉となるのだ。それゆえ、それぞれの体験によってさまざまなニュアンスを持つことになる。

このように、オリアンハイ人とカザフ人の協力には、ターマル関係を通じて、両者間の交渉の歴史や個人それぞれの経験が織りこまれるのである。

VII おわりに

以上のように、西モンゴルの3つの郡の間の牧畜民の協力である牧地相互利用について調査・考察した。それによって明らかになったのは、事例それぞれの個別的で操作可能な社会関係と生態条件のすり合わせによって、牧地利用が多様な形態をとることである。その多様な形態をたどっていくと、エスニクな要素は、絶対的なものではなく、相対的

な社会的距離として、そこに反映されていることが分かった。例えば家畜預託料の多寡の判断材料になることはある。しかし、婚姻やオリアンハイ人のエスニックな儀礼であるオボー祭りのように、カザフ人が排除される形態は、すくなくとも牧地相互利用については見つからなかった。むしろ、牧畜においてどのような形態でもカザフ人とオリアンハイ人の協力は可能だと言える。

このように、人的透過性のない一見強固なカザフ人とオリアンハイ（モンゴル）人とのエスニック境界は、家畜の移動、つまり家畜の透過性によって乗り越えられるのである。しかしながら、柔軟性としてのこの境界多孔性は、国際援助プロジェクトの理念や法制度の変化と地元牧畜民の行政への要求によって、行政境界を越える家畜預託や牧地の融通に対する行政の態度が硬化し、規制される傾向にある。その一方で、温暖化によって環境の変動がより大きくなる状況のなかで、行政の建前とは乖離したかたちで、実践はつづけられ拡大してもいる。

さらに、本稿は、カザフ人とオリアンハイとの間に結ばれる友人関係であるターマルについてとりあげ、牧畜における協力関係の内実について検討した。ターマルによる家畜預託そのものは、自然イベントに対する反応として発生した協力関係の形態の変化の現れである。2000年代初めのゾドにより、牧地相互利用の形態がオトルから預託に比重が移った。そして、預託関係をより安定的なものにするため、ターマルの関係は結ばれる。それは、親族関係の代替といってもよい。ターマルは、家畜預託の契約に人格的な意味を持たせるのである。

家畜預託を契機とするターマルは、カザフ人側から申し出ることがほとんどで、一般的にカザフ人側がより弱い立場にあるといえる。しかし、自然環境など状況の変化によって、立場は容易に反転する。オリアンハイ人の側も家畜預託の報酬をもらう以外に、この関係を積極的に利用しようとする。

さらに、親族以上に親密な協力関係を持つ1対1のターマル関係も見られた。むしろ、「強い意味」のターマルであるこのような関係こそがこの地域では通常であったのではないだろうか。これは、「弱い意味」でのターマルやモンゴル人どうしの友人（найз）が多数いるのと対照的に、相手が少数の深い関係である。上にあげたMTsさんが、カザフ人のターマルとどのような密な助け合いの関係にあるモンゴル人世帯はいないと語ったように、民族内の友人関係より深い関係だ。言語や宗教の違い、そのエスニック境界に人的透過性がないこと、そして歴史的な対立の背景、これらが逆説的に親密な関係を築くことを必要としているのだろう。民族内の友人は代替がきくが、民族外との友人関係は十分太くないと途切れてしまうのである。

しかしながら、ターマルとはどうあるべきか、それが行動の型として語られることはない。カザフ人が敷物を贈ることも、それが相手への敬意を表す数少ない貴重な品であるからで、「敷物を贈るべき」だとは語られない。ターマルの規範は、乞われたら助力を惜しまないという倫理のみにより構成され、具体的な行動はつねに参照されるが、抽象化された「型」としては經典化されていない。自分自身の実践と見聞きしたことの記憶につながり、モノのやりとりや交際によってつねに構成されなおされ、したがって新しい体験に開かれているのである。

モンゴル国西部のエスニック境界を越えた協力関係は、一義的には自然条件や行政制度、各世帯のもつ物質的・社会的資源等の条件のもとに構築される。変化する自然条件によく適応しそれを利用することは、牧畜と協働の形態の多さとその幅の大きさを生む。エスニック境界は、とくに行政の境界と結びついている場合、その適応の障害となりうる。ターマル関係は、2重の境界に穴をうがち、協働における選択肢を広げるとともに、協働の関係に安定をもたらすのである。ターマル関係は、たしかに自然環境への適応の必要性に基礎をおき、それがなければ結ばれることはないだろう。また、一人か二人の決まった相手がいれば交渉コストも低くなるだろう。しかしながら、ターマルは、プラグマティックで功利的である以上に、求められるままに与えるという、互惠よりさらに深い倫理的な関係である。

以上のように、ターマル関係は、家畜が境界を越えることを契機として結ばれる。そして、エスニック境界とその外延あるいは類の実体をすこしも動かさない。しかし、歴史的な経緯や牧地の競合から生まれる敵と味方という対立の構造や国家の定めた境界があるからこそ、ふかく結ばれる。モンゴル語には、「フェルトの壁（ゲル、ユルタ等）を持つ民族」（эсгий туургатан）という「遊牧民族」をまとめて指す言葉がある。カザフ人とオリアンハイ人は、移動牧畜を営むという点で共通しているが、ふたつの集団の区別はこの言葉の中に溶解することはない。ターマル関係は、いわば離散的総合であり、統合による同化や隔離と領土化をとまなう地域自治とも異なる共生の原理を示している。

註釈

- * 1 本稿は、モンゴル国西部の牧地利用におけるエスニック集団間の協力関係について、おもに生業面をとりあげた上村明（2018）に事例を追加し加筆し、あらたにエスニック間に構築される友人関係「ターマル」についてくわしく論じた。
- * 2 この過程は、70-80年代のアフリカと共通点がおおく、80年代の中国内モンゴル自治区の状況とも重なる。
- * 3 例えば、論文集Fernandez-Gimenez et al. (2012) など。また、報告書の例として、Fernandez-Gimenez et al. (2008) を参照。
- * 4 とくに、冬の営地は日当たりがよく、北風を避け、家畜が夜寝る場所には、糞が厚く堆積していることが条件になる。夏は、冬のように積雪を飲料水のかわりとすることができないので、水へのアクセスが重要な条件となる。
- * 5 18世紀に遅れて清朝に征服された西モンゴルでは、ザハチンやアルタイ・オリアンハイのおおくの地域で旗の境界は作られることがなかった。
- * 6 モンゴル土地法における保有（эзэмших, 英訳はpossession）とは、40年や60年という長期の排他的利用である。現行の土地法は、人工的な建造物のある冬営地と春営地には保有権を認めているが、牧地には認めていない。また、営地の保有権の売買は認められていないが、実質的な所有権として、法律の外で売買されている。
- * 7 俗語として“хам”や「義兄弟」「хуурай ах дүү」（直訳では、乾いた+兄+弟）があるが、一般的とは言えない。
- * 8 1990年代初めのモンゴルでのフィールド滞在中は、ドイツのマックス・プランク研究所に所属してい

た。現在はチューリッヒ大学社会人類学教授。

- *9 モンゴル国において、80年代以降、儀礼が国外との同一性と国内の多様性を捨象することによって、どのようにナショナルな儀礼として作りなおされたかについては、上村(2002)が論じている。

引用文献

- Agrawal, A. (1999) *Greener Pastures: Politics, Markets, and Community among a Migrant Pastoral People*. Duke University Press.
- Базылхан, Б. (1984) *Монгол - Казах толь*. УБ-Ө лгий.
- Fernandez-Gimenez, M. E. (2002) Spatial and Social Boundaries and the Paradox of Pastoral Land Tenure: A Case Study from Postsocialist Mongolia. *Human Ecology* 30: 49-78.
- Fernandez-Gimenez, M. E., A. Kamimura, and B. Batbuyan (2008) *Implementing Mongolia's Land Law: Progress and Issues: Final Report, a Research Project of the Central for Asian Legal Exchange (CALE)*, Nagoya: CALE, Nagoya University (Web version).
- Fernandez-Gimenez M. E., X. Wang, B. Batkhishig, J. A. Klein, and R. S. Reid (2012) *Restoring Community Connections to the Land: Building Resilience through Community-based Rangeland Management in China and Mongolia*. Ca B Intl.
- ハラウエイ、ダナ (2017) 『猿と女とサイボーグ——自然の再発明 新装版』高橋さきの訳、青土社。
- Humphery, C. (2012) Hospitality and tone: Holding patterns for strangeness in rural Mongolia. *The Journal of the Royal Anthropological Institute* 18-s1: S63-S75.
- Humphery, C. and D. Sneath (1999) *The End of Nomadism?: Society, State and the Environment in Inner Asia*. Durham: Duke University Press.
- Kamimura, A. (2013) Pastoral Mobility and Pastureland Possession in Mongolia. In: N. Yamamura, N. Fujita, and A. Maekawa (eds.) *The Mongolian Ecosystem Network: Environmental Issues Under Climate and Social Changes* (Ecological Research Monographs), pp. 189-205. Springer.
- 上村明 (2002) 「ウマの搾乳儀礼『グーニー・ウルス・ガルガハ・ヨス』再考——儀礼の身体性と政治性」小長谷有紀編『北アジアにおける人と動物のあいだ』東方書店、285-325頁。
- 上村明 (2014) 「地図の描き方と統治の手法——モンゴルの古地図をめぐる」吉田ゆり子・八尾師誠・千葉敏之編『画像史料論』東京外国語大学出版会、236-253頁。
- 上村明 (2015) 「モンゴル国の牧畜世帯における移動と生計」『日本モンゴル学会紀要』45:17-29。
- 上村明 (2016a) 「アルタイ・オリアンハイ人はなぜアルタイ山脈を越えたのか?——1930年の『集団逃亡』について」『内陸アジア史研究』31 (2016.3): 119-143。
- 上村明 (2016b) 「ポスト社会主義モンゴル国牧畜部門における開発プロジェクトと土地改革」フスレ編『日モ関係の歴史、現状と展望——21世紀東アジア新秩序の構築にむけて』風響社、151-174頁。
- 上村明 (2017) 「適応する『主体』: モンゴル国牧畜民の世帯構成から」『文化人類学』82 (1): 14-34。
- 上村明 (2018) 「エスニック境界を越える牧畜民の協力: モンゴル国西部のオリアンハイ人とカザフ人の事例から」『生態人類学会ニュースレター』24 (2018): 76-81。
- 松井健 (2011) 「序章フィールドワーク、〈生きる世界〉、グローバリゼーション」松井健・野林厚志・名和克郎編『グローバリゼーションと「生きる世界」——生業からみた人類学的現在』昭和堂、1-19頁。
- メイヤスー、クワンタム (2014) 「潜勢力と潜在性」黒木萬代訳『現代思想』42 (1): 78-95。
- Niamir-Fuller, M. (2000) Managing Mobility in African Rangelands. In: N. McCarthy, B. Swallow, M. Kirk, and P. Hazell (eds.) *Property Rights, Risk, and Livestock Development in Africa*, pp. 103-131. International Food Policy Research Institute.

岡洋樹 (1988) 「ハルハ・モンゴルにおける清朝の盟旗制支配の成立過程 —— 牧地の問題を中心として」『史学雑誌』97(2): 1(145)–32(176)。

Радлов В. В. (1893) *Опыт словаря тюркских наречий*, т. 1, ч. 2. СПб.

ストラザーン、マリリン (2015) 『部分的つながり』大杉高司ほか訳、水声社 (M. Strathern (2005) *Partial Connections*. AltaMira Press)。

Султан, Т., Зулькафилъ, М. (eds.) (2010) *Баян-Өлгий аймгийн нэвтэрхий толь*. УБ.

Золбаяр, Г. (ed.) (2016) *Монголын казахын угсаатны зүй*. УБ.

■ 著者紹介

①氏名(ふりがな): 上村明(かみむら・あきら)

②所属・職名: 東京外国語大学総合国際学研究院・研究員

③出身地: 長野県。

④専門分野・地域: モンゴル地域研究・文化人類学。

⑤学歴: 東京外国語大学大学院地域文化研究科博士後期課程。

⑥現地滞在経験: モンゴル、中国内モンゴル・新疆。

⑦研究手法: 参与観察、聞き取り調査、統計、史料調査。

⑧所属学会: 日本文化人類学会・日本モンゴル学会・国際モンゴル学連盟・国際コモンズ学会・内陸アジア史学会。

⑨推薦図書: ハラウェイ、ダナ(2017)『猿と女とサイボーグ——自然の再発明 新装版』高橋さきの訳、青土社。